

【高校部門・最優秀賞】

二階の六畳間

私立追手門学院高等学校 第1学年 池田 真菜

小学校五年生のとき、学校に行けなくなった。学校という世界を手放した私は、与えられた自分の部屋で毎日を過ごしていた。カーテンを閉め切り、ベッドに横たわって自分に麻酔をかけるようにスマホを触っていた。家どころか部屋から一步も出ない日もあったが、世界を六畳しか知らないせいで特に問題だとは思っていなかった。

六年生になって、あるゲームにドハマリした。いわゆる“推し”に出会ったのだ。それまで不規則な生活を送っていた私は、ゲーム内のイベントに参加するために朝起きて夜寝るようになった。キャラクターと一緒にの趣味を持ちたくて料理を始めたりもした。

八月のある日、ゲームのリアルイベントの開催が決まった。会場は大阪の都市部で、もちろん行ったことのない場所だった。

一人で電車に乗ったことも数えるほどしかなかった私は諦め半分で、それでも諦めきれずに母に相談した。すると意外なことに母はあっさり「いいよ。」と言うのであった。

当日、外に出た瞬間少し身震いした。肌を灼く本物の暑さを体験したのはいつぶりだろう？何もない青空を見上げるだけで目にまぶしさが突き刺さって痛くなった。

クローゼットの中で、一番かわいいと思える服と、近頃めっきり話さなくなっていた五つ上の姉にお願いして塗ってもらったリップ。それだけで私はどこまでもいける気がした。

その日から私は、ちょくちょく外へ出るようになった。姉に連れ出してもらったり、地元のフリースクールに通ったりした。

推しは今日も画面の中で笑っている。これからもこちらの世界に出てくることは無いけれど、間違いなく私の世界の一部だ。今では毎日電車で通学するようになった。今度は一人ではなく、友達と一緒に。

六畳間の外の世界は、スマホの中の君が教えてくれた。今日はカーテンを開けて、この文を書いている。